

# 文化の共存

東京大学大学院工学系研究科建築学専攻 教授 **伊藤 毅** いとう たけし

## あのギリシャ人

倉敷の大原美術館にエル・グレコ(El Greco)の「受胎告知」が収蔵されていることはよく知られた事実である(写真-1)。アジアに端っここの日本という小国に、しかも私立の美術館のコレクションにスペイン、いや西欧の巨匠のひとりであるエル・グレコの代表的作品があるということは、ほとんど奇跡に近い。この驚くべき快挙は、倉敷紡績の総帥・大原孫次郎と洋画家・児島虎次郎という史上稀にみる名コンビによってもたらされた。

大原美術館にはこのほかにもルノワールやゴッガンなど世界的な画家の作品を所蔵しているが、とりわ

けエル・グレコのこの作品が大原美術館の手に落ちたのは偶然の連鎖がなせる技であった。渡欧中の児島がパリのとある画廊で競売のために飾られているのをたまたま発見し、作品のすばらしさに衝撃を受け、ただちに大原に多額の資金を送金させて買い取ったものである。当時はEメールなんて便利なものはなかったから、日本に連絡して送金されるまでの間、児島はこの作品が他の画商の手に渡らないか気が気でなかったろう。ともあれ「受胎告知」の落札は、画家のもつ絵に対する慧眼と児島の眼を信じて資金提供を惜しまなかった大原の二人がいてはじめて可能な出来事であった。

このエル・グレコという作家、実はクレタ島生まれの人である。本名をドメニコス・テオトコプーロス



写真-1 受胎告知(エル・グレコ)



写真-1 トレドの風景(エル・グレコ)

(Doménikos Theotokópoulos)という。エル・グレコはニックネームで、スペイン語で「あのギリシャ人」という意味である。そして彼の画業にとってもっとも重要な後半生はスペイン、トレドという町を舞台に繰り広げられたのだ。

グレコは晩年に「トレドの風景」という絵を残している(写真-2)。小林秀雄はこの絵が「嵐のトレド」と俗称されていることに言及したのち、「嵐は作者の心の裡のものである。トレドの町が十字架にかけられているのである。評家は、この絵の構成について、セザンヌを引合いに出したがるが、この絵の語る心の嵐は、寧ろゴッホに通ずると私は感じた。これも、この世の見納めと言った風なものを感じさせる稀有な風景画である。」と的確な指摘をしている(『小林秀雄全作品22近代絵画』新潮社、2004年)。

## グレコのトレド

もう少し、エル・グレコの足跡を追ってみよう。1541年クレタ島に生まれたグレコがヴェネツィア、ローマで修業期間を終えたのち、スペインの地を踏んだのは1577年、画家人生の円熟期を迎えようとしていた36歳の時であった。この時、スペインはフェリペ2世(Felipe II)の治世下であり、都がトレドからマドリッドに移され、新首都マドリッドの郊外では王家の一大モニュメントとなるエル・エスコリアル修道院(Monasterio de El Escorial)が建設中であった。グレコはこの大仕事を狙ってスペインに渡ったといわれる(中野京子『名画で読み解くハプスブルク家12の物語』集英社、2008年)。

グレコの絵はしかし王の好みに合わず、宮廷画家への途は閉ざされるが、グレコはマドリッドを離れ旧都トレドに腰を落ち着け、そこで水を得た魚のように旺



盛な作家活動を展開する。トレドの町はグレコを歓迎し、グレコもまたこの町を愛した。グレコはスペインの永住権を獲得し、終生トレドで仕事をし続けた。グレコの代表作のひとつとして有名な「オルガス伯の埋葬」はトレドのサント・トメ(Santo Tomé)教会の注文に応じて描かれたもので、その斬新な構図と精細な描写は当時大きな評判を呼び、グレコの名は一躍ヨーロッパ中に広まることになる。

先にみた「トレドの風景」はグレコ晩年の1596~1600年に制作された作品と推定され、小林秀雄がいうようにこの町の風景を愛おむグレコの異様な熱情が作品全体に漲っている。エル・グレコの住んだ地区はかつてユダヤ人地区であって、ここには「エル・グレコの家美術館」(Casa-Museo de El Greco)と称



写真4 タホ川とトレド

する建物が公開されているが、これはグレコが実際に住んだ家ではなく、同じ地区にあった別の空き家を利用して1911年に再現したものである。したがってエル・グレコの家そのものではないが、16世紀に遡る住宅遺構として貴重である(写真-3)。

### 共存 = ラ・コンビベンシア

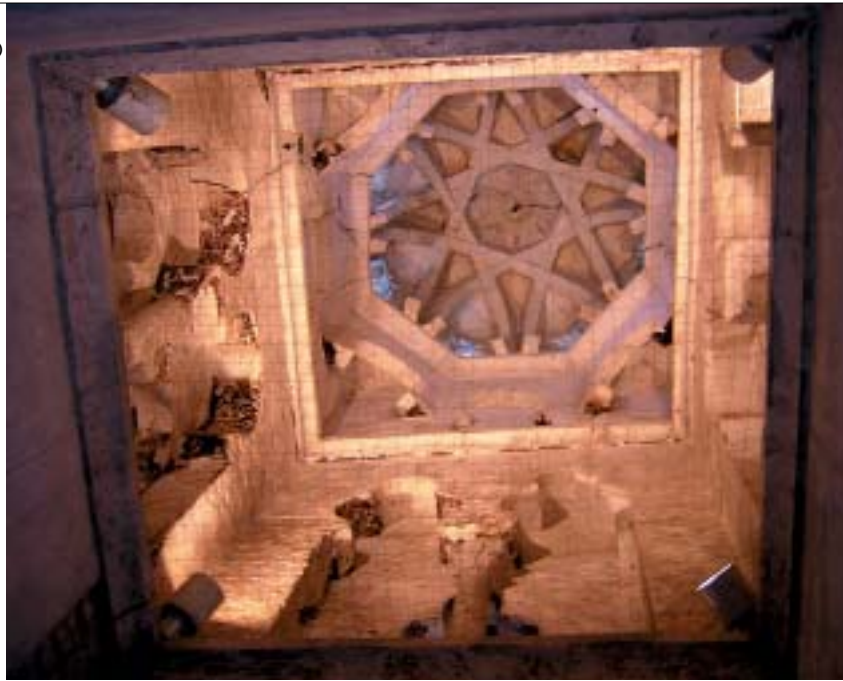
トレドの都市としての歴史は古い。スペインのほぼ中央、マドリードの南70キロメートルのタホ(Tajo)川沿いのかなり急峻な丘の上に都市的な集住がはじまるのは、遅くとも5世紀に遡る。タホ川はイベリア半島を東西に横断する最長の川で、スペインとポルトガルにまたがる水上交通の要である。ポルトガルの首都リスボンはタホ川の河口にあり、スペインの新旧の首都トレドとマドリードがいずれもタホ川沿いに立地するのをみれ

ば、この川がいかに重要視されたか一目瞭然である。トレドは町の3方がタホ川に囲まれていて、自然の要害をなしている(写真-4)。

トレドの特徴はこうした自然の要害に加えて、さらに堅固な市壁によって守られた都市内部には古くからさまざまな民族や宗教が入り込み、それらは互いに対立することなく緩やかな「共存」を果たしたという点にある。スペイン語のラ・コンビベンシア(La Convivencia)は英語のthe coexistence、つまり共存という意味で、スペインのレコンキスタ(国土回復運動)が終了し、ユダヤ教徒の国外追放が始まる1492年(イスラム教徒は1502年)までの間、キリスト教徒、ユダヤ教徒、イスラム教徒がそれぞれ居住区を分けながらも平和の裡に併存・交流していた時代を指す。その中心的な都市がトレドであって、トレドは宗教と文化の坩堝として都市的な成熟度を高めていった。



写真-5 ムデハル様式の天井  
(光のキリストのモスク)



アッ=ザルカーリー(Al-Zarqali, 1028 ~ 1087年)という人物はわが国ではほとんど知られていないが、スペインでは11世紀に活躍したアラブ系の数学者・天文学者として有名である。アッ=ザルカーリーはトレドに生まれ、さまざまな器具を考案して科学的な天文学の基礎を築いた。とりわけ彼の手になる天文表、「トレド表」はよく知られている。当時、トレドは宗教上の対立もなく、ヨーロッパでもっとも安全な都市であったので、各地から多くの学者がトレドに集まり、知の最先端を形成していたのである。

13世紀のアルフォンソ10世(Alfonso X)の治世下、トレドは名実ともにヨーロッパにおける文化・学問の一大中心都市となり、アラブ世界ですでに高度な達成をみた哲学ほか各学問分野の膨大な蓄積をラテン語に翻訳しようとする一大プロジェクトが進められた。宗教・文化の増埶となったトレドは学知においてもアラブとヨーロッパを架橋する重要な貢献を果たしたのである。このような事績からアルフォンソ10世は賢王(EI Sabio)と呼ばれる。

### 宗教建築の展覧会場

トレドにおける宗教の共存は、結果として3大宗教のモニュメントとして可視化されている。トレドはまるで宗教建築の展覧会場のようなのである。

まずは、イスラム都市の旧市街を意味するメディナ(Medina)と称する地区にたつ建築からみてみよう。この地区には古くから裕福なイスラム教徒が居住し、その中心部にある「光のキリストのモスク(Mezquita

del Cristo de la Luz)は、イスラム教がこの地においてしっかりと根づいていた事実を雄弁に物語る。

このモスクはきわめて小規模で、わずか8×8メートルの大きさしかないが、当時の文化度の高さを示す珠玉の作品である。建立碑文が残されており、裕福なイスラム教徒の寄付によって999~1000年に建設された事実がわかる。正方形のプランは9つのベイ(区画)に分割され、それぞれの上部にはやや荒削りのムデハル(Mudéjar)様式の装飾を施した天井が覆う(写真-5)。ムデハル様式とは、国土回復運動の展開のなかで、11世紀から12世紀にかけてイスラム文化とキリスト教文化が混淆して成立した一種の折衷様式であって、寄せ木細工風の装飾や幾何学的文様に特徴がある。このモスクが建設された時期はまだムデハル様式はそれほど本格化しておらず、したがってこの小品は折衷様式のごく初期の、しかも年代のはっきりした貴重な事例といえることができる。

ユダヤ教のモニュメントとしては、サンタ・マリア・ラ・ブランカ(Santa María la Blanca)と名付けられたシナゴーク(synagogue、ユダヤ教の教会)がある(写真-6)。この建築はシナゴークとはいえ、1180年、キリスト教的土壌で育ったイスラム系の建築家がユダヤ人の

ために設計したものであって、最初から混淆した様式が採用されている。したがって、この建築もまた大きな分類ではムデハル様式ということになる。トレドは早くから宗教の共存が実現していたので、ムデハル様式が生まれる土壌がすでに用意されていたのである。

トレドの町の中心に鎮座するのは、やはりキリスト教会堂である。トレド最大のモニュメントであり、13世紀の盛期スペイン・ゴシックの代表作品として知られるのが、トレドのサンタ・マリア大聖堂( Catedral de Santa María de Toledo )である。この教会堂は数ある教会堂のなかでもっとも上位に位置する大主教座のある教会堂( Catedral Primada de Toledo )であって、

1226年からスタートし15世紀に至るまで断続的に建設が進められた( 写真-7 )。この教会はしたがってトレドにおけるカソリックの総本山ということになるが、建築様式的にはゴシックを基調としながらも、そこかしこに折衷様式であるムデハルのディテールがみられる。

鐘楼は当初2基立ち上がる予定であったが、実現したのは正面左手のタワーだけである。これもムデハル様式の影響を濃厚に受けたゴシック尖塔であり、トレドのランドマークとして親しまれている。トレドには急勾配で細い街路が迷路状に縫うように走っているが、街路の先にこの鐘楼が臨める場所がいくつか存在する( 写真-8 )。



写真-6 サンタ・マリア・ラ・ブランカ



写真-7 トレド大聖堂



## 工芸と文化

フェリペ2世がマドリッドに遷都したため、トレドは16世紀以降古都という地位に甘んじることになるが、長い歴史をかけて形成された都市文化はそう簡単には衰えない。トレドは鉄製工芸品の生産でよく知られる。とくに熟練した技術と経験に裏打ちされた鑑識眼が必要となる刀剣類の生産はいまなおトレドが他の都市の追随を許さない(写真-9)。エル・グレコはおそらくそうしたトレドの文化の厚みと、他者を迎える都市の寛容さに魅入られるようにして、この地に定住することになったのだろう。

トレドの魅力はスペイン人がラ・コンビベンシアという言葉で表現しようとするように、やはり複数文化の共存にあることは間違いない。その共存の仕方は、それ

写真-8 トレドの街路



写真-9 鉄の工芸品店

それぞれが別々に存在していたわけではなく、高いレベルでの異種交流が行われたことに注意したい。学知・芸術・文化の混ざり合いは、要素の一つひとつが判別できないほどの一体性を示している。建築におけるムデハル様式はイスラム教・ユダヤ教・キリスト教の教会堂それぞれに共通してあらわれ、まるで音楽における通奏低音のような機能を果たしたといえる。こうした文化の共存共栄を可能にしたトレドという町はヨーロッパのなかでも特異な都市といってよい。

現代わたしたちは、文化という言葉にあまりにも慣れすぎていて、その重みや深さを十分に理解しているとはいえない。したがって、安易に異文化交流とか、多文化主義などのキャッチフレーズが飛び交うことになる。

トレドにおける文化の共存は、今日的にいうグロー

バリズムやグローバル・シティにおける文化交流とは対極的な位置にある。そもそも文化は本来きわめて個人的なものであり、場所に大きく規定された存在である。しかしトレドのように懐の深い都市は、外に向かって開き、多くのコスモポリタンを迎え入れる余裕をもっていた。そして文化の共存に至るプロセスは決して容易な道程ではなく、そこには長い時間の経過が必要であった。トレドという町はユネスコ世界遺産に指定された死んだ文化財都市ではけっしてなく、生き生きとした開放性を歴史的時間のなかで獲得した都市であるといえる。都市の美質のひとつに、トレドのように多種多様な要素を寛大に迎え入れつつ成熟していく姿があるとすれば、依然としてわれわれがこうした歴史都市から学ぶべき点は少なくない。